

住宅リフォーム制度創設で関係団体が相次ぎ要請

上越市はすでに実施を決断、制度設計に着手

9月議会における一般質問に答え、村山市長は住宅リフォーム助成制度創設の検討を約束しました。その後、建築関連業者などから市長に同制度の創設と制度設計についての働きかけが相次いでいます。

10月8日には、上越建築組合連合会（加藤真一会長）など18団体が、「（住宅リフォーム制度を創設した県内自治体では）住宅工事の需要を喚起し、地元建築関連業者の仕事確保に大きな役割を果たし、経済波及効果を上げていく」として、同制度を早急に導入するよう求めました。

14日、今度は、上越民主商工会（宮崎陽会長）が同制度の創設と制度内容についての要望書を提出しました（写真上）。これには私も同席しました。

同会は、住宅リフォーム助成制度の創設についての市長発言は、「市内建設業者だけでなく、建設業者以外の方々をも大いに励ましてい



る」と評価。そのうえで、制度の創設にあたっては、地域経済の振興、地域経済の循環の観点を重視してほしいとして、①補助限度額を10万円程度とし、多くの市民が使えるようにしてほしい、②補助率は利用意欲がわくようにすること、また、市内中小建設業者に仕事が回るようにしてほしい、③他の制度の補助金と重なる場合であっても、対象としてもらいたい、④施工業者は市内に本店を有する法人又は住所を有する個人事業主とすること、⑤申請手続きはできるだけ簡素にしてほしい、の5点を申し入れました。

応対した稲荷副市長は、「現在、制度設計に取り組んでいるが（すでに実施済みのところでは）考え方も様々だ。事例などを研究して取り組んでいきたい」ととても前向きでした。

新井柿崎線整備で県土木部長要請

県道新井柿崎線整備促進議員連盟（宮崎政国会長）は12日県庁を訪問、野澤英

之助県土木部長に対して歩道整備、交差点改良、防雪柵設置など20数項目について早期に実現してほしいと要請しました（写真下）。

これには議員連盟からは14人が出席し、上越市選出の5人の県議も同席してくださいました。

野澤部長は、「県の土木予算のピークは平成8年度で富士山とほぼ同じ高さの約3700億円だった。いまは財政状況が厳しく、約3分の1になっている。様々な工夫をしながら前に進めたい」と挨拶

シリーズ 上越市内の橋

第49回 新町橋

「新町橋」と書いて「しんまちばし」と読みます。高田の東部、天野原新田と上新町を結び、一級河川櫛池川にかかった橋です。

橋の欄干から下流方向を見ていたら、大きな白い鯉を見つけました。最初は一匹だと思っていたのですが、他にもほぼ同じ大きさの黒っぽい鯉が二匹いることに気づきました。

時々、尾を振って、上流へと向かう姿はサケのようにも見えませんでした。

橋長は約70メートル。竣工は1978年（昭和53年）12月です。



拶しました。

その後、折笠道路管理課長が要望に対する説明を行い、「最も要望の多い歩道整備については地域振興局から優先順位をつけて上げてもらっている。防雪柵に関しては、実情を踏まえてやっていきたい」とのべました。



【ツクバネ】ビャクダン科の落葉低木。漢字では「衝羽根」と書きます。羽根つき遊びの羽根に似ていますね。実は煎って食べることができます。写真は吉中グランド脇にて7日撮影。

どこの家族の歩みを見ても、新たな親戚関係のはじまりがあります。代表的なのは、結婚にともなうものでしょう。結婚によって、それまでほとんど付き合ひのなかった家族の人たちと新しい親戚としての付き合いがスタートします。

わが家では、私たち夫婦の結婚や弟たちの結婚、さらには子どもたちの結婚によって次々と新しい親戚関係ができました。そのなかで、次男の結婚にともなうものが最も新しく、印象に残っています。

二年ほど前のことでした。次男が翌春に結婚するというので、その前に、連れ合いになるといって彼女の両親との昼食会を市内の割烹で行いました。若い二人はすでに五年ほど付き合いをしていたのですが、彼女の両親と会ったのはその時が初めてでした。昼食会はそれぞれの両親の顔合わせをと二人が計画し、準備してくれました。

昼食会の当日、私たち夫婦は、約束の時間よりも少し早めに割烹に到着しました。相手方の両親も偶然、私たちと同じ時間帯に到着していました。駐車場で車から降りると、ニコニコして私たちの方に向かって歩いてくる夫婦の姿があります。そばに次男と彼女もいましたので、すぐにわかりました。私たちが一緒に食事をする相手方だったのです。

私はまず、彼女のお父さんの顔を見ました。見た瞬間、ホッとしました。こう書くと思われぬかもしれませんが、私と同じく頭の毛が薄い人だったのです。それも私と付き合いのある町内会長さんと顔がそっくり。それだけで親近感が持てました。

割烹の予約してあった部屋へ入ってお互いに挨拶を交わした後、すぐに食事になるのかと思っていたら、次男と彼女が風呂敷を広げはじめました。見てびっくりしましたね。中に入っていたものは何と結納の品々だったのです。それなら、それなりのこととしてあげたのと思ったのですが、若い二人に任せた以上は注文をつけるわけにはいきません。二人が考えたやり方で進めました。

振り返ってみると、この時が一番緊張した時間となったように思います。その時の記念写真が何枚かあります。いずれの写真も、若い二人はニコニコしていて、それぞれの両親は極めて真面目な顔をしていましたから、相当緊張していたのでしようね。

さて、昼食会。彼女のお父さんは偶然にも私と同じくビール党で、しかも麒麟ラガー派でした。お父さんは職人さんですので、日本酒をがっちり飲み、性格的にもかなり厳しい人ではないかと勝手に想像していたのですが、そうではありませんでした。ビールを注ぎあった時、お父さんの手の指が目に入りました。乳しぼりをしていた私に負けないくらい太い指です。働きの職人さんだと思いました。

びっくりしたのは焼いたヒラメの食べ方です。頭の部分と骨をほんの少し残してきれいに食べるお父さんにみんなの目が集まりました。私もきれいに食べる方ですが、食べられる部分を「お見事！」と言いたくなるほど徹底的に食べる、その様子には圧倒されました。私も試みに挑戦したところ、ほぼ同じレベルまで食べることができました。ここまで食べると、残物をもらったネコはがっかりするかも知れません。焼いたヒラメのおかげですっかり打ち解けた雰囲気になりました。

昼食会では、初顔合わせとは思えないほど話はずみ、三時間ほど一緒に楽しい時間を過ごすことができました。彼女の両親は、近くの山に行ったり、温泉に入ったりすることが好きだということがわかりました。いつか、一緒に出かけたいものです。

吉川区でも大勢の人たちが支えて100キロマラソン成功



えちごくびき野 100キロマラソンの日。1500人を超える選手のみなさんが健脚を競いました。小雨がぱらついてちょっと寒い日となりました。でもランナーにとってはちょうどよかったのかも知れません。午後1時半過ぎから3時半頃まで吉川コミュニティプラザ前広場で応援してきました。

「ようこそ風の里 吉川区へ」というゲートをく

ぐって次々と走ってくる選手たちに拍手を送りつづけてきました。選手のゼッケン番号と名前が放送されると、

ボランティアの中学生のみなさんが声をそろえて応援します。その姿がとても良かったですね。今回の大会でも様々なボランティアのみなさんが頑張りました。

今回のマラソン大会には吉川区から小池修さん、市村真理子さんなど6人の人たちが選手として参加しました。玄関前のテントのそばにいたら、ひとりの女性ランナーがほほ笑みながら軽く手をあげて走り抜けました。「感じのいい女性だな。誰だろう」そう思っていたら、なんと真理子さんでした。お連れ合いが迎える中、休憩所へ。

私がいる間にもうひとり吉川区出身の選手が入ってきました。市村雅幸さんです。上越タイムスの記者をやっていることもあって、多くの人たちに知られています。テント前では、地元の原之町の人たちやボランティア、吉川中学校の生徒のみなさんから激励を受けていました。

